

札幌市博物館活動センター 情報誌 ミューズ・レター

Muse Letter

No.71
July 2019

コエゾゼミの羽化

北海道では平地から低い山に生息し、鳴き始めるのは7月ころから。北海道の夏のゼミの中で最もよく見られる種類です。幼虫は地中で数年かけて成長し、ようやく地上に出てきます。羽化直後は体が柔らかく、淡い色をしています。羽が硬くなり、飛べるようになるまで、こうして数時間じっとしています。

撮影：神戸 崇

謎の生物 “イッカク”のひみつ

文・写真／学芸員 古沢 仁

クジラの中に“イッカク科”と呼ばれるグループがあります。現在、イッカク科にはイッカクとシロイルカの2種がいます。

名前の由来はイッカクの雄に、成長すると、3mにもなる長い牙が上顎から1本生えることから、伝説の動物・一角獣(ユニコーン)にちなんで名付けられました。実際に、長い牙がユニコーンの角として高く売られたこともあったそうです。

一方、シロイルカは子どもの頃は灰色か、赤みを帯びた灰色ですが、成長すると真っ白くなることからシロイルカと名付けられました。

博物館活動センターには石狩低地帯を中心に道内で発見された化石が収蔵され、さまざまな研究者の協力を得ながら順次研究を進めています。昨年、福井県立恐竜博物館の一島啓人博士を中心に、羽幌町から発見されたイッカク科の化石を研究し、新属新種のイッカク科の化石「ハボロムカシルカ」*Haborodelphis japonicus*として論文を発表しました。

これまで明確なイッカク科の化石は、前期鮮新世のベルギー、鮮新世の北米バージニア州、後期中新世のメキシコからそれぞれ1点ずつ発見されていました。今回、北海道羽幌町の前期鮮新世から発見されたイッカク科の化石は、世界で4例目の発見で、日本を含む北西太平洋からは、初めての産出になります。後期中新世(1100～530万年前)に登場したイッカク科は、前期鮮新世には大西洋、太平洋の東西に広がりながら進化していったことが分かりました。

現在のイッカク科はイッカク、シロイルカいずれも体長が5m前後。北極海あるいはその周辺の冷



図1 ハボロムカシルカ (SMAC1390) 左側面

たい海にだけすんでいて、北海道周辺の海で見ることにはできません。それでは、ハボロムカシルカはかつて北極海よりも南の北海道の海にもすんでいたのでしょうか？前期鮮新世(今からおよそ400万年前)の北海道の海の様子を知る方法として、海水面の高さを復原して寒暖を推定する方法があります。地球全体が温かくなると陸の雪や氷が溶けて海に流れ出ますが、地球上にある水の量はほぼ一定のため、海水面が高くなります。逆に寒いと陸に降った雪が溶けずに地上に積もっていくので、海水面は低くなります。今から400万年ほど前の北海道は海水面の低い状況が続いており、今よりも寒く冷たい海だったと考えられます。ハボロムカシルカはその冷たい海を泳いでいたのでしょう。また、現在のイッカクやシロイルカの体長はおよそ4～5mですが、発見されたハボロムカシルカの推定される体長は2m前後であることから、まだ成長の途中の若い個体であると考えています。

世界のイッカク科の化石は世界中でまだ4点しか発見されていないため、現在生きているイッカクやシロイルカをはじめ、これまで研究された化石との関係や進化の過程などについてはまだ謎のままです。

文献: First monodontid cetacean (Odontoceti, Delphinoidea) from the Early Pliocene of the north-western Pacific Ocean (北西太平洋で初めて見つかった前期鮮新世のイッカク科の化石), H. Ichishima, H. Furusawa, M. Tachibana, M. Kimura, Paleontology. 2018.



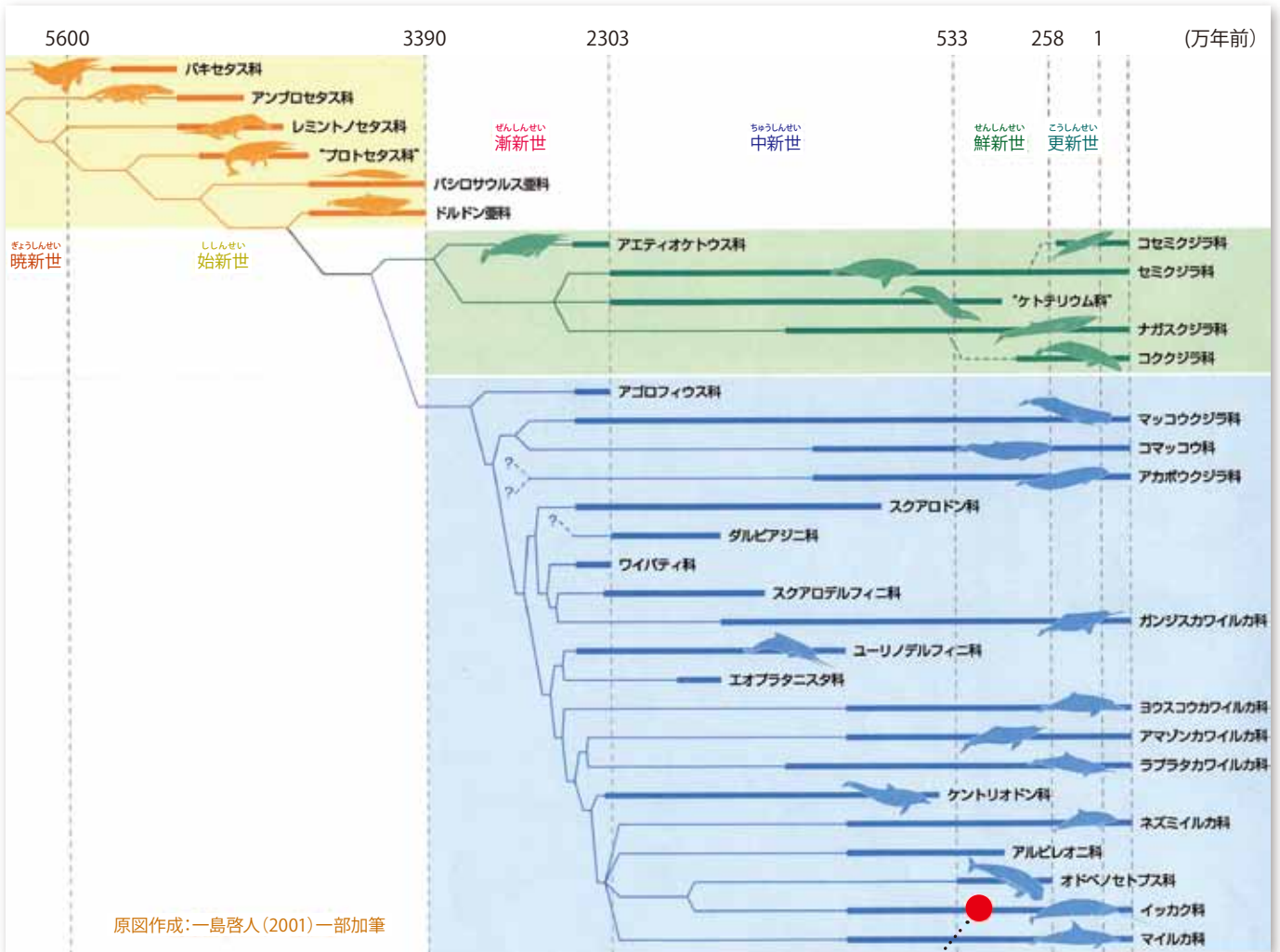


図2 クジラの系統図 原図作成:一島啓人(福井県立恐竜博物館)

●がハボロムカシルカ(SMAC1390)の産出ポイント

ホット
コラム

展示室につき
サツポロカイギユウって、何色？

○月×日 展示解説員 村中 光

ある日、こんな質問をし
てくれた女の子がいまし
た。「サツポロカイギユウっ
て、茶色だったの？」

のジユゴンと、灰色から黒色
のマナティーです。サツポロ
カイギユウも同じような灰
色だったのかもしれない。

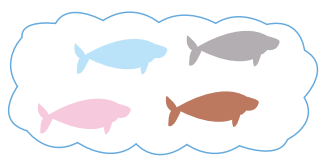
展示室には 古沢学芸
員が描いた『820万年前の札
幌』の絵があるので、「こん
な灰色ですよ」と答えたく
なるところですが、答えは
「分かりません」。なぜな
ら、化石として残りやすい
のは骨や歯など硬い組織
の部分で、バクテリアに分
解されやすい皮膚の色ま
では分からないことがほ
とんどだからです。

「この動物は何色だったん
だろう?」「どうしていな
くなっちゃったの?」考え始め
ると興味は尽きません。

とはいえ、カイギユウ類
は今でも地球上に生息して
いるので、色を参考にする
ことはできます。

博物館活動センターに
来て、見学や質問をす
ると思われぬ発見がある
かもしれませんよ。

現在生息しているカイ
ギユウ類は、灰色から白色



コレクション クエスト

ふだん公開していない
収蔵物を紹介します。
さあ、標本の世界を冒険だ！

エゾノハナシノブは日本固有の植物で、主に山地に生え、花はサクラのような形で淡い青紫色をしています。じゅうたんのよう地面をはうシバザクラと同じハナシノブ科です。

分布範囲は札幌を含む北海道南西部から本州の一部に生育し、中でも札幌は生育記録が多く、分布の中心地とされています。エゾノハナシノブは札幌の植物相を代表する植物の1つといえるでしょう。

博物館の資料収集活動はたくさんの標本を集めることも大事ですが、その中から札幌の自然史を物語る“物的証拠”を見出してコレクションすることも大切な使命の1つです。

文・写真／学芸員 山崎 真実



エゾノハナシノブ 植物標本No.10325

File No.7
セミ調査員、活動中!

SMAC活動レポート

当センターで行われる、市民の自主的活動や、学校との連携など、さまざまな活動を紹介しします。

博物館活動センターでは、札幌の自然の魅力や独自性を解明していくため、札幌にまつわる調査や研究、資料の収集・保存に取り組んでいます。今年は、札幌市内のどこにどんなセミがいるのかを調べるため、事前に募集した調査員の皆さんと、7月1日から「セミの抜け殻」を集めています。

平成20年(2008年)～平成22年(2010年)にも「札幌市セミ調査」を実施し、札幌市内の森や市街地から3年間で1,681個体のセミの抜け殻が集まりました。市内に生息するセミは10種類とされていますが、前回の調査ではアブラゼミ、コエゾゼミ、エゾゼミ、アカエゾゼミ、エゾハルゼミ、ミンミンゼミ、ツクツクボウシの7種類の抜け殻が採取されています。

約10年が経過して、札幌のセミの生息状況はどのように変化したのでしょうか？ 前回採取できなかったニイニイゼミ、ヒグラシ、エゾチッチゼミの抜け殻は発見できるのでしょうか？ 調査結果が楽しみです。



札幌市で見られるセミと抜け殻



交通アクセス

- 地下鉄南北線「澄川駅」北出口から徒歩約10分
- 地下鉄南北線「南平岸駅」東出口から徒歩約14分

札幌市博物館活動センター infomation

入館料：無料
開館日：火曜～土曜 開館時間：10時～17時
休館日：日曜・月曜、祝日、年末年始(12月29日～1月3日)



ホームページアクセス
二次元コード



発行 札幌市博物館活動センター

〒062-0935 札幌市豊平区平岸5条15丁目1-6 Tel : 011-374-5002 Fax : 011-374-5014
Email : museum@city.sapporo.jp ホームページ : <http://www.city.sapporo.jp/museum/>



ミュージス・レターは、植物油インキおよび、環境省が定める「グリーン購入法」の適合紙を使用しています。